ごおんうれしや

■楽曲データ

歌詞：浅原才市　作詞

楽曲：飯田一実　作曲

発表：仏教音楽研究所　1985年

初演：―

初出：『佛教音楽』第11号　仏教音楽研究所　1985年

管理番号：M0957

■創作の経緯

仏教音楽研究所（現・浄土真宗本願寺派総合研究所仏教音楽・儀礼研究室）による作曲募集（第５回、1983［昭和58］年度）の入選作品。《おかげさま》《もろてあわせて》とともに「演歌三部作」として発表。

■校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第２巻収録

底資料：版下原稿

比較資料：『佛教音楽』第11号　仏教音楽研究所　1985年

校訂の詳細：比較資料（オルガン伴奏版）をもとに、ピアノ伴奏版へ編曲

■解説

浄土真宗は、聴聞に始まり聴聞に終わるといわれます。そういう意味で、浄土真宗は「言葉」の宗教と言ってよいのではないでしょうか。阿弥陀さまの本願のはたらきは「南無阿弥陀仏」のお名号の言葉となって、一切の生きとし生けるいのちの根源に来てくださっているのです。ところが、現代においては、いろいろな言葉が、伝わりにくくなっているように思います。

「ごおん」、すなわち「恩」という言葉もその一つです。『仏教語大辞典』（中村元著、東京書籍発行）によると、「恩」とは第一義として「恵むこと。他人を助けること」であり、さらに「恩を知る人」とは、「なされたことを知る者」と記されています。また、「恩とは、何がなされ、今日の状態の原因は何であるかを心に深く考えること」ともあるので、決して古めかしい言葉でも、難しい言葉でもありません。私が、今ここに生きていることの因を尋ねていくことなのです。

◆詞の内容について

１番の「あなた」は、阿弥陀さまのことを指しています。「がてん（合点）がいらぬ」とは、阿弥陀さまの救いにはこちら側（私）のはからいは一切いらない、と言っているのでしょう。

また、二番の「うしお（潮）」は、海水のことです。「海」と「潮」はひとつのもので、決して別のものではないことを例えとして、私を離れて「おやさま（仏さま）」はなく、阿弥陀さまを離れて私はない、という機法一体のみ教えを、わかりやすく表現しています。

◆作詞者について

作詞は、妙好人（厚い信仰をもち、念仏に生きる人びと）として知られる浅原才市です。彼は、この詞では恩について、「ごおんうれしや」と、実にさらりと表現しています。

才市は、1850（嘉永３）年、石見国（現・島根県）に生まれ、1932（昭和７）年、83歳で亡くなりました。数えで11歳の年に大工の年季奉公へ入り、50歳頃まで船大工として働いたのち、下駄職人となります。

青年期から聞法を始めた才市は、晩年、仕事のかたわら木屑などに浄土真宗の領解を書き付けるようになりました。1913（大正２）年頃からはノートに清書するようになり、約20年間で１万首近くの詩をつくったようですが、戦災で消失するなどし、現在に伝わるのは約6000首ほどです。

戦前に、龍谷大学の学生だった寺本慧達や、仏教哲学者の鈴木大拙らがとりあげたことで、妙好人を代表するひとりとして知られるようになりました。

◆作曲者について

飯田一実は、作曲当時、静岡県磐田市で音楽講師をつとめていました。

◆曲について

歌いやすい民謡調のメロディーです。浅原才市が詩に込めた心を、よくかみしめて歌うことが大切になってきます。２小節を小さなまとまりとして、滑らかに歌えるようにしましょう。

①出だし（９小節目１拍目）は低い「シ」の音から始まります。力まず、民謡調の自然な動きを大切にしましょう。

②13小節目は、音程に注意しましょう。

③17小節目からは音量豊かに。

⑤19小節目２拍目「き」は、「機法一体」の「機」です。そのことを意識して発音してください。

⑥20小節目の２分音符は長さを十分に保ちましょう。

⑦21小節目は、９小節目と音型が似ています。間違えないようにしましょう。

◆楽譜

二部合唱版が、『讃歌集　二部合唱』第１巻に掲載されています。

解説執筆：大分哲照（御堂演奏会指揮者　福岡教区西嘉穂組明圓寺住職）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 49（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』

第 176 号収録）を加筆・修正のうえ、転載。

Copyright: Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.